倫理プリント

ユダヤ教とキリスト教

イエス・キリスト

（ｉ）ユダヤ教

■ **ユダヤ教とは** … ユダヤ人の民族宗教であり、[1　　]の母胎となった宗教

【 聖典 】[2　　]：世界の創造から人類の誕生、イスラエル民族の歴史など様々な物語が語られる

【　神　】[3　　]：宇宙万物をつくった創造神であり、人を支配する人格神

天地創造・アダムとイブ
バベルの塔・ノアの箱舟 など

■ **ユダヤ人の歴史**

ユダヤ人 ＝ 苦難の民（イスラエル人やヘブライ人ともいう）

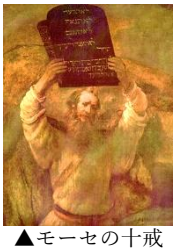
BC.20c　古代イスラエル人　カナンの地(現在のパレスチナ)へ定住するが、他民族からの支配を受ける

BC.17c　エジプトへ集団移住するものの、迫害に遭い奴隷状態となってしまう

BC.13c　[4　　]に率いられて 60 万人のユダヤ人がエジプト脱出＝[5　　]
※脱出の途中にシナイ山でヤハウェから[6　　]を授かる

BC.10c　カナンの地へ帰還しヘブライ王国を建国するも分裂。

BC.586~538　民衆はバビロンに強制連行されて、奴隷労働を科される。(＝**バビロン捕囚**)


▲モーセの十戒

王国の滅亡や理不尽な迫害を受けてでも、彼らを支えたのはヤハウェからの救済であった。

■ **ヤハウェとユダヤ教**

唯一神 ヤハウェ

イスラエル民族は神が必ず救済する。だから[7　　]を守りなさい
この世の終末には、[8　　](メシア)を遣わして、ユダヤ人を繁栄に導く

自分たちは神に選ばれし民族なんだ！＝[9　　]

・神がいつか守ってくれるという希望の信仰が、民族の再生をもたらすと考えた→ユダヤ教の誕生
・救済を受けるために示された律法(＝トーラー)を守らない場合、[10　　]として厳しい審判を下す。
・ユダヤ人は「神との契約に基づく選ばれた民族」であるという考えは、他宗教を認めない態度へ繋がる。

＋α　モーセの十戒（律法の一例）

①私以外の神を持つな　②偶像を崇拝するな　③神の名をみだりに唱えるな　④安息日を聖とせよ
⑤父と母を敬え　⑥人を殺すな　⑦姦淫するな　⑧人の物を盗むな　など…

これらの律法をユダヤ人は厳格に守った。しかし現状は厳しいまま変わらない。
いつしかユダヤ教は律法ばかりにこだわる形式的なものとなっていき、神の救いなんて無いじゃないか･･･
という不信感が募っていく。これが救世主の登場を望む期待を膨らませていき、遂に彼が誕生する。

[　　]年[　　]組[　　]番　名前［　　］

（ⅱ）イエスの思想

AC.1c　ローマによる支配に苦しむ中、ヤハウェの説いた「神の国」到来と、救世主を待望する風潮が高まる。
→来る日に備えて[11　　]を促す[12　　]の運動が広まる
▲水で罪を洗い清め、新たな生命を授かる儀式

イエス　パレスチナ(前4?-後30?)

自分を愛するように、隣人を愛しなさい

・『[13　　』（彼の言動がまとめられた、キリスト教の聖典）
・ユダヤ人として現在のパレスチナに生まれる。父は大工のヨセフ、母はマリア。
・30 歳の頃、ヨハネから洗礼を受け、人々に[14　　](神から受けた喜びや幸せの知らせ)を説き始める。
・彼の死後、イエスは救世主であったとして弟子たちが教えを伝道していき、世界宗教キリスト教として広がる。

ヨハネから洗礼を受けたことで、イエスは神の言葉を人々に説くことに目覚める。
「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」　⇒　伝道を開始（＝教えを広めること）

原典　**山上の垂訓（イエスが山で弟子たちに語った言葉）**
心の貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである。悲しむ人々は幸いである。その人たちは慰められる。
柔和な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。義に飢え渇く人々は幸いである。その人たちは満たされる。…

このように、富のある人が必ずしも幸福とは言えず、むしろ貧しい人・飢えている人・悲しみ嘆く人ほど
本当の幸せを味わうことができると説いた。弱者へ寄り添う伝道こそが、彼の第一歩であった。
また、イエスの教えはユダヤ教を批判的に捉えており、内容の異なる教えに当時の人々は驚いたという。

ユダヤ教の教え	内容	イエスの教え
ユダヤ人は神に選ばれた特別な民族	**選民思想**	すべての人々は神の前に[15　　]
厳格に守らないと救済されない	**律法に対して**	律法を守る事は神の愛に応えること 神への忠誠心で律法を守る（＝**律法の内面化**）
神は罪を犯した人間を厳しく裁く	**罪に対して**	神は罪を犯した人間を[16　　] 不完全な人間への絶対的な愛＝[17　　]
[18　　]	**神の捉え方**	[19　　]

★キリスト教道徳の教え
1.[20　　]：「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」
2.[21　　]：「自分自身を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」
3.[22　　]：「何ごとでも人々からしてほしいと望むことは、人々にもその通りにせよ」

神は、不完全な人間のために恵む、絶対的な愛をもっており、それに応えることで人々は救われると説いた。
イエスの教えは、保守的なユダヤ教有力者の反感を買い、反逆者として捕らえられ十字架の刑に処されることとなる。
彼の死後、弟子たちの間でイエスが復活した後、昇天したという信仰が広まる。イエスは神の子であって、
自らを生贄として捧げることで人間が負うべき罪(＝[23　　])を償ってくれた(＝[24　　])と悟った。
弟子のペテロやパウロによって、イエスの教えが世界に広められた。これが現在世界最大の宗教の原点である。

＊安息日のエピソード　「安息日は人のために定められた。人が安息日のためにあるわけではない」として、
安息日は仕事をしてはならないという律法を破ることになっても病人の治療に専念した。

倫理プリント

ユダヤ教とキリスト教

イエス・キリスト

（ｉ）ユダヤ教

■ **ユダヤ教とは** … ユダヤ人の民族宗教であり、[1　**キリスト教**　]の母胎となった宗教

【 聖典 】[2　**『旧約聖書』**　]：世界の創造から人類の誕生、イスラエル民族の歴史など様々な物語が語られる

【　神　】[3　**ヤハウェ**　]：宇宙万物をつくった創造神であり、人を支配する人格神

天地創造・アダムとイブ
バベルの塔・ノアの箱舟 など

■ **ユダヤ人の歴史**

ユダヤ人 ＝ 苦難の民（イスラエル人やヘブライ人ともいう）

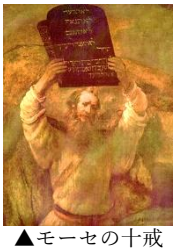
BC.20c　古代イスラエル人　カナンの地(現在のパレスチナ)へ定住するが、他民族からの支配を受ける

BC.17c　エジプトへ集団移住するものの、迫害に遭い奴隷状態となってしまう

BC.13c　[4　**モーセ**　]に率いられて 60 万人のユダヤ人がエジプト脱出＝[5　**出エジプト**　]
※脱出の途中にシナイ山でヤハウェから[6　**十戒**　]を授かる

BC.10c　カナンの地へ帰還しヘブライ王国を建国するも分裂。

BC.586~538　民衆はバビロンに強制連行されて、奴隷労働を科される。(＝**バビロン捕囚**)


▲モーセの十戒

王国の滅亡や理不尽な迫害を受けてでも、彼らを支えたのはヤハウェからの救済であった。

■ **ヤハウェとユダヤ教**

唯一神 ヤハウェ

イスラエル民族は神が必ず救済する。だから[7　**律法**　]を守りなさい
この世の終末には、[8　**救世主**　](メシア)を遣わして、ユダヤ人を繁栄に導く

自分たちは神に選ばれし民族なんだ！＝[9　**選民思想**　]

ユダヤ人

・神がいつか守ってくれるという希望の信仰が、民族の再生をもたらすと考えた→ユダヤ教の誕生
・救済を受けるために示された律法(＝トーラー)を守らない場合、[10　**裁きの神**　]として厳しい審判を下す。
・ユダヤ人は「神との契約に基づく選ばれた民族」であるという考えは、他宗教を認めない態度へ繋がる。

＋α　モーセの十戒（律法の一例）

①私以外の神を持つな　②偶像を崇拝するな　③神の名をみだりに唱えるな　④安息日を聖とせよ
⑤父と母を敬え　⑥人を殺すな　⑦姦淫するな　⑧人の物を盗むな　など…

これらの律法をユダヤ人は厳格に守った。しかし現状は厳しいまま変わらない。
いつしかユダヤ教は律法ばかりにこだわる形式的なものとなっていき、神の救いなんて無いじゃないか･･･
という不信感が募っていく。これが救世主の登場を望む期待を膨らませていき、遂に彼が誕生する。

[　　]年[　　]組[　　]番　名前 [　　]

（ii）イエスの思想

AC.1c　ローマによる支配に苦しむ中、ヤハウェの説いた「神の国」到来と、救世主を待望する風潮が高まる。
→来る日に備えて[11　**洗礼**　]を促す[12　**ヨハネ**　]の運動が広まる
▲水で罪を洗い清め、新たな生命を授かる儀式

イエス　パレスチナ(前4?-後30?)

自分を愛するように、隣人を愛しなさい

・『[13　**新約聖書**　』(彼の言動がまとめられた、キリスト教の聖典)
・ユダヤ人として現在のパレスチナに生まれる。父は大工のヨセフ、母はマリア。
・30 歳の頃、ヨハネから洗礼を受け、人々に[14　**福音**　](神から受けた喜びや幸せの知らせ)を説き始める。
・彼の死後、イエスは救世主であったとして弟子たちが教えを伝道していき、世界宗教キリスト教として広がる。

ヨハネから洗礼を受けたことで、イエスは神の言葉を人々に説くことに目覚める。
「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」　⇒　伝道を開始（＝教えを広めること）

原典　**山上の垂訓（イエスが山で弟子たちに語った言葉）**
心の貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである。悲しむ人々は幸いである。その人たちは慰められる。
柔和な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。義に飢え渇く人々は幸いである。その人たちは満たされる。…

このように、富のある人が必ずしも幸福とは言えず、むしろ貧しい人・飢えている人・悲しみ嘆く人ほど
本当の幸せを味わうことができると説いた。弱者へ寄り添う伝道こそが、彼の第一歩であった。
また、イエスの教えはユダヤ教を批判的に捉えており、内容の異なる教えに当時の人々は驚いたという。

ユダヤ教の教え	内容	イエスの教え
ユダヤ人は神に選ばれた特別な民族	**選民思想**	すべての人々は神の前に[15　**平等**　]
厳格に守らないと救済されない	**律法に対して**	律法を守る事は神の愛に応えること 神への忠誠心で律法を守る（＝**律法の内面化**）
神は罪を犯した人間を厳しく裁く	**罪に対して**	神は罪を犯した人間を[16　**赦す**　] 不完全な人間への絶対的な愛＝[17　**アガペー**　]
[18　**裁きの神**　]	**神の捉え方**	[19　**愛の神**　]

★キリスト教道徳の教え
1.[20　神への愛　]:「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」
2.[21　隣人愛　]:「自分自身を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」
3.[22　黄金律　]:「何ごとでも人々からしてほしいと望むことは、人々にもその通りにせよ」

神は、不完全な人間のために恵む、絶対的な愛をもっており、それに応えることで人々は救われると説いた。
イエスの教えは、保守的なユダヤ教有力者の反感を買い、反逆者として捕らえられ十字架の刑に処されることとなる。
彼の死後、弟子たちの間でイエスが復活した後、昇天したという信仰が広まる。イエスは神の子であって、
自らを生贄として捧げることで人間が負うべき罪(＝[23　**原罪**　])を償ってくれた(＝[24　**贖罪**　])と悟った。
弟子のペテロやパウロによって、イエスの教えが世界に広められた。これが現在世界最大の宗教の原点である。

＊安息日のエピソード　「安息日は人のために定められた。人が安息日のためにあるわけではない」として、
安息日は仕事をしてはならないという律法を破ることになっても病人の治療に専念した。